

この世界には
ロマンがある

目からの
うろこ!

不信感を乗り越えて協働へ

ふ~ちゃん、初めて ボランティアするの巻

▶ひととまちとの交差点 Vol. 03 ▶宗像海人航海日誌
▶ロープレむなかつ2018

表紙イラスト/司馬さやか

¥0
TAKE FREE

地島
天然わかめ

が当たる!!

宗像特産品
プレゼントコーナー

詳しくはウラ面を
ご覧下さい。

漫画第3話

宗像海人航海日誌

Ship's log 03

僕たちにまわりつくジレンマ



共進丸 機関長
こんだ こうすけ
権田 幸祐

1984年6月25日生まれ。先祖代々続く漁師の家に生まれる。春から秋は巻き網漁、冬はトラフグ漁に従事する傍ら漁業を盛り上げるべく日々奮闘中!

「日本の海から魚が消える日」。こんな見出しやフレーズを目にした方は多いはず。年々減り続ける海洋資源を危惧し、50年以上も昔から資源保護の重要性や乱獲防止策の指針が示され、いろいろな対策が実施されてきましたが、資源は枯渇し続けているのがこの国の水産の現状です。日本の海洋資源枯渇問題はとても深刻です。その原因は気候変動によることもさることながら、十分な資源管理システムが出来ていないがための実質「乱獲」と言わざるを得ない要因がとても大きいでしょう。

「魚は獲らなければ増える」。これは周知の事実であり、数多くの実証データも存在します。資源管理を行い、次々と資源を回復させている国が現れている中、日本が一向に改善できない裏には、僕達が漁業を行う上での特有のジレンマがあります。僕自身も漁師として海と向き合う中で、資源の枯渇を痛いほど肌で感じ、資源管理の重要性を訴えている一方、魚を獲らなければ生きていけません。また、自分たちが獲らなくても他の誰かが獲ってしまう。ならば、大規模な禁漁というのみの手ですが、それは魚屋さんなどにとっては死活問題。数年間の禁漁で魚が増えても禁漁後に買ってくれる魚屋さんがいなくなったのでは本末転倒なのです。

日本の海の多様性も資源管理政策の難易度を高めていると言われています。豊富な魚の種類や漁の種類の多様さが、海外での成功事例が通用しない原因です。しかし、そうも言っていられせん。この国に特化した資源管理政策、そして持続可能な生産のあり方をどう実現していくべきなのか。それは本当に実現可能なのだろうか……。

ぐいぐ

ロープレむなかつ2018

2018.12/8(土)-2019.1/20(日)

Local×Play=ロープレは地域づくりについて体感することを目的としたプログラムです。2016年よりスタートして、今年で3年目を迎えます。今回は、宗像に拠点を置き活動する6つの団体に日頃の活動を体験するプログラムを準備していただきました。



ロープレ2018
オープニングイベント

日時:12月8日(土)18:30~20:30

締切日:12月3日(月)

場所:メイトム宗像 結工房(宗像市久原180)

定員:20名 参加費:1,000円

講師 共進丸機関長 権田 幸祐さん

海の恵 玄界灘の新鮮な魚のつけ丼、汁物などをお楽しみいただけます。

今年のロープレむなかつは全部で6企画!
詳細はwebサイトでご確認ください!

<http://meitomu.com/rople2018>



宗像特産品 プレゼント

コーナー

抽選で
2名

宗像が誇る海の恵み、
「地島天然わかめ」が当たる!!

右記QRコードまたはURLからアンケートに答えていただいた読者の皆様の中から抽選で、地島の天然わかめをレシピと一緒にお届けします。

<http://ur0.link/MCID>

応募締切は2019年1月31日(木)アンケートはこちら!!



国内流通量1%以下の
貴重な国産天然わかめ!

国内で流通しているわかめの約86%は輸入、13%は国内養殖されたものということ、ご存じでしたか?地島は残り1%以下の天然わかめが採取できる、貴重なわかめの産地です。「どこにも負けない自慢のわかめをたくさんの人に知ってもらいたい!」とブランド化に挑戦しています。地島天然わかめは柔らかいのにシャキシャキした歯ごたえがあるのが特徴です。

[商品]地島天然わかめ 100g/702円(税込) [取扱販売店]宗像観光おみやげ館(道の駅むなかつ隣)
[お問合せ先]宗像市コミュニティ協働推進課 0940-36-5394
[詳細]<https://munakata-project.com/portfolio/wakame/>



地島の漁師が採る天然わかめ

¥0 TAKE FREE



むなかつ市民フォーラム

<http://forum-munakata.org>

ふらぐバックナンバーはこちらから!
ふ~ちゃんの過去話などもチェックできます。



Check!





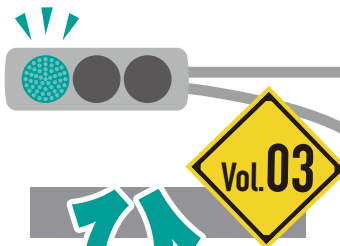
宗像ビブリオバトル倶楽部



ビブリオバトル参加者の皆さんと



家族で参加した地域の清掃活動



ひとまちの交差点

宗像のまちで秘かに活動する魅力的な人。
その「ひと」が「まち」と出会い、交わるきつかけを、
ふらぐ編集部が取材してきました。



ふらぐ編集部
しぎよう

地域活動に積極的に関わる人はリーダーシップがあつて周りの人を引っ張っていくような人ばかり！...と思っていたしぎよう編集員。しかし今回取材した品川さんはちよつとタイプが違いました。楽しそうに地域と関わっている品川さんの魅力とともに、品川さんの意外な交差点を取材しました。

しぎよう：品川さんこんにちは！この1、2年、むなかた市民フォーラムが行う事業に参加いただいたり、他にも楽しそうに地域活動をしていたりいる品川さんですが、宗像在住歴は意外に浅いそうですね。

品川さん：今年で3年目になりますね。僕は熊本出身なんです。実は宗像には縁もゆかりもないんです。仕事の関係で西日本各地を移り住んでいたんですが、妻が久留米の出身なこともあつていずれ福岡に落ち着きたいねと話してました。そんなとき北九州支店に勤務できることになり、北九州まで通えて、妻も友達がいる宗像に住むことにしたんです。

しぎよう：もともと積極的に地域に出て行くタイプだったんですか？

品川さん：全然ですよ！引っ越してきたら家族で参加できる地域のイベントがあつて、たまたまそれに参加したのが最初だったと思います。基本的

には人見知りなので知り合っているイベントに行かないんですが、主催をしていた立花さんとそこで知り合つて、他の活動にも誘われていく中でどんどん知り合いが増えました。ときには「えっ、同じマンションなんですってねー」なんていうこともあつて。人に誘われながら少しずつ地域に出て行くようになりましたね。

しぎよう：ふらぐ編集長もしている立花ですね。品川さんは2年前くらいに当センターが行った「本の屋台プロジェクト」にも参加してくれましたよね。

品川さん：そうですね。あれは誘われたわけではないんですが、もともと本が好きだし、立花さんともいるなと思って参加しました。

しぎよう：小学生と就学前のお子さんがある品川さんですが、それくらいのお子さんをもちお父さんが地域活動に関わるのって珍しい気がします。

品川さん：うちは下の子が発達障がい、見守りに家族だけでなく近所の人の目も欲しいというのがありました。僕も地元では近所のおじちゃんおばちゃんたちなど地域に育ててもらったので、自分の子どもも両親以外の人に触れさせて育てていきたいなと思っていました。そうすると人に助けてもらう機会が次第に増えて、恩返しというか、逆に自分にできることはしようと思うようになりました。だから誘われたり頼

しながわ やすのり
品川 恭徳さん
本と映画を
こよなく愛する50歳



2016年に参加した「本の屋台プロジェクト」でビブリオバトルに出会い、バトルとして参戦。この楽しさを宗像で広めたいという思いから、2018年MBBCビブリオバトル倶楽部を立ち上げる。

<http://u0u1.net/MFBX>

まれたりすることはあまり断らないようにしています。ただ、頼まれすぎて自分の首を絞めがちですけど。(笑)

しぎよう：すごい！でも頼まれるのは品川さんが信頼できて安心できる人だからだと思います。外でお見かけした時にも笑顔で挨拶してくださるし、とても人見知りとは思えません！そんな品川さんがこれからやっていきたいことは何ですか？

品川さん：僕は本が好きなんです。最近本を通して人と交流する「MBBC宗像ビブリオバトル倶楽部」という活動を始めて。あと10年、現役の間はPTAや子どもたちに関わりながら、そういう自分の好きなことで地域のために頑張りたいなと思っています。

“あなたにとっての交差点は、どこですか？”

“立花さんにいろんな地域活動に誘われたことです。”



一緒に頑張りたい

ビブリオバトルとは
バトル！がオススメ本を紹介し合い、観戦者が一番読みたくなった本を投票してチャンプ本を決める書評合戦。

不信感を乗り越えて 協働へ

取材に
行ってきましょい

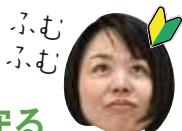


NPO初心者の
アンドウさん

宗像市でダンボールコンポストの講座を開催するごみ住連。団体の歴史は宗像市の焼却場建設に対して不安が集積した住民運動から始まった。活動を始めて20年、現在は団体と市が協力しながら活動を進めるが、その転機となったのは果たして。

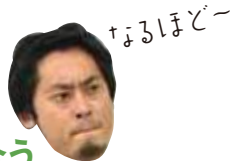
立ち上げはごみ焼却場の建設の 白紙撤回を求める運動

平成10年、住民に納得のいく説明がないまま宗像市ごみ焼却場建設の話が進められようとしていた。環境や安全に不安を感じた周辺住民たちが立ち上がり、「ゴミ問題を考える住民の連合会・宗像」が結成され、ごみ焼却場建設の白紙撤回を求める運動をはじめた。現代表の岡田智子さんはこの時にメンバーの一人として団体に関わり始めた。「市との話し合いは約4年間も続きました。現場で24時間座り込みや監視をしたりといろいろと大変でした」と当時を振り返る。



子どもたちの健康は私たちが守る

建設を巡り裁判にまで発展したものの、焼却場は建設されることとなったが、団体は解散しなかったという。「団体に所属していた何人かで、別の形で地域の環境づくりに貢献できることはないだろうか」と話し合いました。そんなときに偶然、新聞でダンボールコンポストの存在を知ったんです」と岡田さん。ごみを資源にして堆肥を作り、土を健康な状態に戻すことで安心安全な野菜を育てて食べるというダンボールコンポストの趣旨に共感。地域で育つ子どもたちのために安心安全な食べ物を提供したいとの思いから、岡田さんたちはすぐさま、宗像でのダンボールコンポストの普及に取り組み始めることに。



立場の違いを超えて 「協働」という形で手を取り合う

メンバーは必要なノウハウを学ぶためにダンボールコンポスト養成講座に通い、アドバイザーの資格を取得。その後、宗像で自主的に講座をはじめることとなった。メンバーの一人が当時の市長宛てに手紙を書いたことで市での認知度も高まったという。

「私たちの団体は、子どもたちの健康と笑顔のために、生ごみの小さなサイクルに取り組んでいます。市長もダンボールコンポストをしてみませんか？」

その後、着実に実績を積み重ね、市との協働事業としてダンボールコンポストの普及活動に取り組むようになった。市と事業を進めることにに対して抵抗は全くなかったと岡田さん。「それまではお互いの立ち位置の違いから主張がちがっただけで、市には市の言い分があることはわかっていましたので」と笑顔で話す。

今年で市との協働を始めて9年目を迎える。ごみ住連が講座の企画・運営を行い、講座の広報や会場の手配、団体スタッフのスキルアップの機会などを市が率先して提供。市では現在ダンボールコンポストの基礎講座を受講した人に「ダンボールコンポストセット」をプレゼントしている。「このような市のバックアップはとてありがたいです。市民がダンボールコンポストを長く続けるための大きな力になっています」と岡田さん。共に活動を進める宗像市役所環境課の青木さんは「年間のダンボールコンポストセットの販売数は宗像市は非常に多いです。市の広報だけでは、ここまでダンボールコンポストを浸透させることは難しかったと思います。ごみ住連の皆さんの精力的な活動があってこそです」と協働の成果に確かな手応えを感じている。



アドバイザーが丁寧にサポート



ダンボールコンポスト講座の様子



環境課 青木さん

勉強に
なりました!

プロフィール

ごみ住連 代表 岡田 智子さん

健康な野菜を食べることを目的にダンボールコンポストを使った土づくりに取り組む。宗像市との協働事業で年間60回を超える講座を開催。ダンボールコンポストとはダンボール箱の中に基材を入れて、微生物の力で生ごみを分解し、堆肥にするもの。1基あたり3〜6ヶ月で約50kgの生ごみが処理できる。



代表の岡田さん(右)
副代表の松尾さん(左)

アンドウさん、
タチバナくん、
今回の取材も
勉強になりましたか?



わがっしょい!

